

政治的対立 今後根強く残る



—本人提供

ペルー社会ではフジモリ氏の功績を巡っては賛否両論ある。ただ1990年の大統領就任後、経済不振とテロのまん延で中南米諸国で最も深刻な社会的混乱を抱えて沈みつつあったペルーを救ったという評価では、おおむね見方が一致している。フジモリ氏は当初、社会階層格差の激しいペルーで既存政治

村上勇介・京大教授(ラテンアメリカ政治)

のアウトサイダーとして大統領選に挑んだ。貧困層を味方に付けて勝利し、インフレ退治とテロ撲滅に成功して中間層にも支持を拡大した。ところが政治手法は次第に権威主義的姿勢を強めて、人権侵害にも及び、側近の汚職に巻き込まれて失脚した。

次期大統領選への出馬の意向を表明していたが重い病状が続いていた。自らの支持層を結集させた上で長女ケイコ氏を立候補させ、テコ入れを図る狙いだったとみられる。

次第に自らもエスタブリッシュメント(既存の支配層)の一角を占めるようになった。現在のフジモリ派支持層は保守的な宗教右派や既得権益層が中心で、当初から様変わりしている。2026年までに実施される

ペルーでは構造的な経済格差が悪化している。ただ政策を通じて根本的な問題に対処する機運は乏しく、政治は特定の政治家への好き嫌いで動いている。フジモリ家への賛否を軸にした政治的な対立は、ペルーで今後とも根強く残るだろう。